

中国語学習の新たな方向性

(2011年5月)

column3

北陸大学未来創造学部教授
村田和弘

この春、ゼミ生の1人である齋藤雅樹君（業績の名誉と責任を負う意味で本名で呼ぶ）が無事卒論を提出して卒業した。卒論のタイトルは「中国語の“吗”疑問文と反復疑問文における用途の差異について」というものだ。中国語の疑問文にはいくつかの文型が存在する。その中から、齋藤君は、文末に置かれる助詞“吗”（「～か？」に相当する語気助詞）を使用する疑問文（これを“吗”疑問文と呼ぶ）と、肯定形と否定形を連続させる構文（例えば「行く行かない？」と尋ねるような形の疑問文で、これを反復疑問文と呼ぶ）を使い分ける際、どのような場面ではどちらの文型がより多く用いられるのか、そしてそれはなぜなのか、ということを論じようとした。文型の使い分けの基準はどこか、という論点は、実は初級学習者にとってたいへん厄介な問題である。場面に即した文型が上手く選択できれば誰も苦労はしない。それができる人は中国語会話がすでに初級を超えている。そして、初級テキストの現状は、初級者のこのような素朴な疑問に、十分に答え得ているとは言い難い。「どちらでも可」などと書いてあった日には、悩むあまりこれから中国語を学習していくことに対して自信を喪失してしまうであろう。もっと親切にルール化できないものか。例外の存在を認めつつ、最低限これだけは押さえておくべし、という教学的便法を端的に提示できないものか。齋藤君の論に沿いつつ、中国語学習の新しい方向性について述べてみたい。

まず初級テキストの実態を見てみよう。齋藤君も使用した『実用漢語課本』日本語版の説明を見ると、“吗”疑問文は「平叙文の文末に疑問を表す助詞の“吗”を付け加えれば、疑問文となる」（第2課の語法部分）、反復疑問文は「中国語の疑問文の一形式で、述語の主要成分（動詞あるいは形容詞）の肯定形と否定形を並べて反復疑問文を作る。この疑問文は“吗”を用いる一般疑問文と同じ働きをする」（第13課の語法部分）と説明されている。「形は違うけれど働きは一緒」と説明されて納得できる人はいい。「形が違うのに働きが同じとは何だ」と考える人はどうしたらよいのか。その理由まで説明すると授業が先へ進まない、だから説明しない、今は形式を把握すべし、という教授法である。そこから先は研究の領域に入ってしまうという“おそれ”を抱いているのであろう。

では、研究者はどう説明しているのか。齋藤君は先行研究を何本か引いた後、代表として奥水優氏の論考「反復疑問文をめぐって」（『中国語学』247号、2000年）を挙げている。それによると、「反復疑問文と“吗”疑問文について最も大きな区別は、真の問いかけ、つまり全く分からない事について相手に尋ねる場合には反復疑問文をえらび、疑問の意味だけでなく、場面、イントネーションによっては反語のニュアンスにもなる場合は“吗”疑問文をえらぶ」と説明する。つまり、「尋ねている事柄に対して事実らしいとか実現しそうだと言問者が考えているとき“吗”疑問文を使う。質問者が答えに対して何らかの予測を持たないで尋ねるときは反復疑問文を使う」（相原茂等『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書』同学社、1996年）とまとめるところと同一である。そうなると、例外はあるにせよ、場面において質問者が質問事項に対して何らかの予測を有しているか否かが、使い分けの

基準となりそうである。単純に答えを知りたいときは反復形（「行く？行かない？」という形）を用い、相手がどちらか答えるのを期待する。一方、例えば見るからに震えている相手に対して「寒い？寒くない？」と尋ねれば、日本語でも喧嘩になる。こういう時は「寒いのか？」という“吗”疑問文を用いる方が、穏当だ。すなわち「予測の当否、あるいは事実の確認」を行うべきなのだ。ここで注意しておきたいのは、いま「喧嘩になる」と書いたが、これは「わかっているのにわからないような尋ね方をし、て答えさせようとする」から喧嘩になることだ。興水氏が論考の中で劉月華氏の「反復疑問文を用いると追求や切迫した感じがこもる」という説明を引用するのも、反復疑問文が使いつらいケースも場面によっては起こり得ることへの目配りである。

ここまでまとめた上で、齋藤君は、実際の使用頻度の調査を行った。筆者が齋藤君の功績を大とするのも、この調査結果においてである。

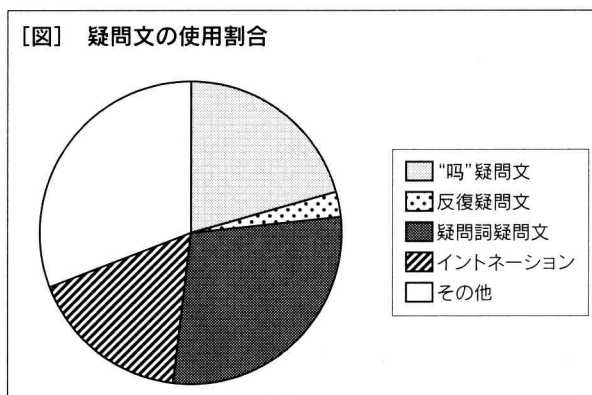
齋藤君は、日本のマンガが中国で中国語に翻訳されていることに目をつけ、あるマンガ（海賊王を目指す少年の冒険活劇）の単行本第1巻の中国語版の会話部分で使われたすべての疑問文を集めたところ、総数で216個あったという。このうち“吗”疑問文は45個（うち3個が反語）あり、反復疑問文は6個しかなかった。残りは、疑問詞疑問文が61個、イントネーションによる疑問が37個、その他（他の語気助詞など）が67個であった。表に示せば、次のようになる。意外なことに、何の予測もなしに尋ねるはずの反復疑問文は、実際の場面の中では、却ってあまり使用しないことが分かる。

では次に、6個しか使われなかった反復疑問文は、どのようなセリフなのか見てみよう。

- a. 要不要来杯果汁？（ジュースでも飲むかい？）
- b. 你要不要也来点吃的？（おまえも何か食べるかい？）
- c. 你有没有小船可以给我啊？（オレにくれる小船を持ってるかい？）
- d. 我……是不是也能做到呢？（オレにも……できるんじゃないか？）
- e. 是不是有只小老鼠潜进了刑场？（小ネズミが処刑場へ紛れ込んだんじゃないか？）
- f. 是不是开会去了？（会議に行ったんじゃないか？）

一見して3つの反復形しか使用されて

【図】 疑問文の使用割合



いないことが分かる。a bの「要不要」、cの「有没有」、d e fの「是不是」であり、テキストに出てくるような一般的な「述語の主要成分(動詞あるいは形容詞)」の反復形ではない。「要不要」は意思を示す助動詞「要」の反復形であるし、「是不是」は「質問者がある事実や状況に対してすでにかなり確かな見通しや見当がついていて、一步つっこんでさらに確証を得たい時」(劉月華等著、相原茂監訳『現代中国語文法総覧』くろしお出版、1991年)と説明されるように、普通の反復疑問文とは大きく異なる。また「有没有」はここでは動詞であるが、目的語の後にさらに動詞を伴う特殊な文型である。つまり、初級テキストで出てくるような反復疑問文は、マンガのストーリーの場面の中では使われていないのだ。例えばaを「你喝不喝果汁?」(あなたはジュースを飲みますか?)とすれば、たいへんテキストらしい文となるが、翻訳者はそれを避けているのである。もしそう尋ねた場合、相手はおそらく「ジュースを飲む嗜好・習慣があるかどうかを尋ねている」と受け取るだろう。あるいは、いま目の前にあるこのジュースを「飲むかどうかを尋ねている」と受け取るだろう。もし目の前にジュースが置かれていないのなら前者、置かれていれば後者であり、どちらにせよ、「飲むかい?」と相手の意思を尋ねる場面とはそぐわなくなる。相手の意思を知りたい時は、やはり「要不要」と尋ねる方が適切だ。

齋藤君は、反復疑問文の使用制限として、会話当事者の社会的地位・年齢の上下関係に着目し、上→下あるいは同じレベルでは使用可能だが、下→上には制限がかかると考えようとした。その論証は不十分で、とても成立したとは言い難い。だが例えばレストランでウェイターが客に対して「您要不要尝尝我们拿手菜?」(わたしどもの得意料理を召し上がってみませんか?)と尋ねることは何ら問題ないが、「您喝不喝果汁?」と尋ねたとしたらどうであろうか。質問が場面にそぐわないと客は感じるのではないか。また、もし空のグラスをウェイターが見つけたならば、客の要望に答えようとして「先生,您喝吗?」(飲みますか?)と親切に尋ねてくれるだろうが、おそらく上のように尋ねない。

上下関係はともかく、場面を設定せずにことばを発することは、およそ不可能であるにも関わらず、これまでの中国語教育においては、このような場面からのアプローチが欠けていたように思う。また、すべてのことばには発話者とその受け取り手が存在するはずである。たとえ独り言であったとしても自ら発して自ら受取っているのだから、両者は存在する。したがって発話の状況から文法説明へアプローチすることも、これからは必要だ。実践力とは、その状況への対応力を指す。齋藤君の論考は、その純粋な疑問ゆえに尊いものであるし、今後の中国語学習のあるべき方向性を示していると思うのである。強引にまとめれば、“吗”疑問文と反復疑問文について、次のルールをまずは設定しておこう。

< 予想があれば“吗”を使い、分からなければ反復で >

< ただし普通の反復は、却って使いづらくもある >